



フィリピンのコミュニケーション

吉 原 久 仁 夫*

今回フィリピン大学経済学部に着任して来るのは3回目である。最初に来たのが1970年、次回が1981年であるので約10年に一度来ていることになる。

この20年間にフィリピンは経済的には東南アジアの劣等生になった。その原因は色々あろう。今回こちらに来て感じたことは官僚機構の事務効率の問題である。経済学部には dean と chairman がいるが、前者が日本流に言えば学部長で、後者が副部長ということになる。授業についてのことは chairman の担当であるが、現在、以前センターに着任した Edita Tan 氏とその職についている。彼女に私の担当になっている「経済発展論」(大学院)の授業は金曜日の朝にして欲しいと頼んでおいた。彼女もそう了解していたのであるが、授業の始まった週の火曜日に私のホテルに電話がかかってきて、金曜日の朝には別の授業が予定されていて、日を変えてくれないかと2-3の学生が言って来ているということであった。20数人の学生が既に登録していると教務から聞いていたので、もし授業時間を変えたら、彼らが今度は困るのではないかと私がたずねたので、話が長くなった。そうしていると誰かが電話を切ってしまい、話は中断された。その内また連絡があると思っていると、一時間ぐらいて電話がかかってきて、授業はその日の朝に既に変えられているので、了承して欲しいということになった。私の方は火曜日の朝で特に困るということはないので、それで了承したのであるが、教職系のところで、私に相談なく、授業時間を設定し、その最高責任者である chairman にもそれを伝えないということは普通考えられないのではなかろうか。どこかで組織内のコミュニケーションに問題がある。変更の通知がはいったのがその日の朝で

あったので、最初の週の授業はこれでふいになった。

それから、ビザの問題である。出発日は5月15日であったが、一カ月後の6月15日に日本で講演を頼まれていたし、また2-3の国際会議も予定されているので、multiple entry visa をもらいたいと思っていた。日本では取得できないので、59日滞在できるビザをフィリピン大使館でもらい、こちらにきてからビザを切り替えることになった。フィリピンの官僚組織の非効率性は聞いていたので、学部長にファックスを送って、前もって準備をしていてくれるように依頼しておいた。到着するとすぐ彼に会って、ビザのことを頼んだ。彼はこういうことはきちんとやってくれる人で、秘書にすぐ書類の準備を指示してくれた。

ここまでは順調であったが、それからが問題である。後から段々に分かったことであるが、学部長が依頼の手紙を学長に書き、学長の手紙と申請書、旅券のコピーを法務省に送り、そこで許可をもらってから、移民局に行き、ビザの発行と外国人登録証を出してもらうという手続きになる。学部長に会ったのが18日の月曜日で、一週間後の月曜日に秘書に学長からの手紙はもらえたかと聞いたらまだだとのことであった。このペースでは間に合わない判断し、6月15日の講演はキャンセルするように主催者にお願いした。しかし、遅くとも59日以内にはビザの書き換えをしなければならないので、急いだことに超したことはない。学長補佐をしていた人に早く手紙を書くように学長に頼んでほしいと言っておいた。これが効いたのか、3日後の木曜日に秘書から電話がかかってきて、すぐ来て欲しいということであった。そのときになって、ようやく申請書を書き、また忘れた箇所があるので、旅券をもう一度コピーしたいとのことであった。秘書の方はこんなことはやったことがないらしく、電話で法務省などに連絡して、必要書類を準備しているのであろうが、

* Kunio Yoshihara, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

話は英語とタガログ語のチャンポンで、どうもコミュニケーションがうまく行っていないようであった。試行錯誤でようやく2週間後に法務省に出す書類が準備できたのであるが、私が疑問に思ったのは、大学で客員教授は私ひとりではないだろうし、こういう手続きのマニュアル化は行われていないのかということであった。学部長の秘書は渉外担当の事務職員に書類を法務省に持って行かせ、一週間で手続きが終わると報告した。私の方は少し気をよくしたが、2-3日後順調にいつているかと聞くと行っているとのことであった。金曜日、遅くともその次の月曜日までには手続きはおわるので、航空券を買っても大丈夫だということであった。6月15日の講演をキャンセルしたとは彼女にこの段階では言っていなかった。しかし、話をしていると、私の旅券は彼女が預かっているとのことである。ビザの発行には旅券が必要だということはどうも知らないらしい。この段階では法務省が移民局に出す書類をまわっていることが後から分かった。遅くともと言っていた月曜日（6月8日）になっても何の連絡もない。2-3日待ってもまだ何も言って来ない。あまり遅くなると、滞在を許可されている59日も過ぎてしまうので、親しい教官にもどうにかならないのかと言っておいた。そうこうしている内に、法務省から許可が出たので、渉外担当の職員が移民局に行っていると連絡が入った。移民局は汚職の多い政府機関として有名である。これでは時間と金がかかるなと思っていて、express fee（250ペソ）を払えば早く手続きが終わるので出して欲しいということであった。袖の下だと思って了解したのであるが、そうではなく、ちゃんと移民局の領収書を出してくれた。移民局にも急ぐ人はexpress feeを払って手続きをするようにと明記してある。

最終的には、6月18日に全て終わった。その日は12時ごろ渉外担当の事務職員と移民局で合流し、外国人登録証のために10指の指紋をとられた。移民局は思った以上に整然と仕事をこなしているようで、

係官の私に対する態度も悪くはなかった。手続きはその日の4時に終わったのであるが、私は少なくともそこで4時間すごし、渉外担当の職員はこのため4-5回ケソン市デシリマン区からマニラに来、接続の悪い電話のダイヤルを数十回は回したとのことである。業者に頼めば、学長の手紙が出た以降はもっと効率的であったのかもしれない。しかし、私はどのように推移するか観察するのに良い機会だと思ったし、またこういう問題は招待した側の責任でもあるとも思った。

これほどずったもんだしたビザの手続きは初めてである。マレーシア、タイにも客員教授として行ったことがあり、ビザの手続きをしたが、もっと効率的に終わった。マレーシアでは、マラヤ大学に1987年に行ったのであるが、大学の本部に担当官がおり、彼の方から私を呼び出してきた。移民局に行くようにと書類を渡され、移民局に行ったら、1時間内で全て手続きは終わった。タイはその数年前に行ったのであるが、ここでは学部で必要な書類をもらい、移民局に行った。2回行かなければならなかったが、移民局で過ごす時間はわずかですんだ。客員教授で招待して、指紋をとるということはどちらの国でもなかった。

フィリピンの問題はなぜ手続きがこんなに煩雑なのかということであろう。しかし、それ以上に気になったのは大学の事務職員および政府機関の一般職員のコミュニケーションの能力の問題である。この問題の根底には統一言語がないことと教育水準の低さの問題がある。

6月30日にラモス氏の大統領就任式があった。経済は新大統領の下でよくなりそうであるが、コミュニケーションの悪さを考えると、あまり楽観視はできない。就任式での新大統領の演説は一般に好評であったが、フィリピン人の何割の人が理解できたのであろうか。そう思いながら私は演説を聞いた。

（京都大学東南アジア研究センター教授）